

VI. 講演会・座談会

今年度は、今期で任期満了となるスタッフの経験と想いを、次の世代に引き継いでいくための、連続研修会を開催したので、その講演会・座談会記録の要約を掲載する。なお、書面の都合上、スタッフ間の意見交換部分は割愛してある。

茅 芙美氏 講演会

『ボランティアコーディネーターとしての5年間を振り返って』 ～大学で正課外教育に関わる意味～

日時：2021年11月8日（月）10：00～11：00

場所：オンライン開催 Zoom 使用

講師：茅 芙美（社会連携教育課、ボランティアコーディネーター）

参加者：佐藤 一宏、阪下 利哉、廣瀬 かおり、小幡 彩子、増田 由紀、
福原 充、大森 真穂、高山 智大、三浦 圭介、結城 俊哉

「ボランティアコーディネーターとはどんな仕事で、どんな役割があるのか。」

私はこのことを心の片隅に置きながら5年間、業務に携わってきました。私たちの仕事にいわゆる典型的な「マニュアル」はありません。

教員ではないけれども、ただの事務職でもない。中途半端な立場だと感じる瞬間もありましたし、どんな立ち位置で学生と接するべきなのか、今もなお考え続けています。

ただ、この問いを常に心の中にお守りのようにぶら下げておくことが、私にはコーディネーターの姿勢として、とても重要だと思っていました。

任期中はボランティアについて四六時中考えていましたが、またボランティアを切り口に、むしろ私自身が人の生き方、人の成長、社会とのかかわり方を学べたように思います。

齢四十を超えて大学生活をある意味「追体験」し、学び直しができたのも、学生たちとふれ合うこの場があったからこそです。

カウンター越しに話を聞いた学生たち、プログラムを通して関わった学生たち一人ひとりの顔を思い出しながら今は感謝でいっぱいです。



立教大学で働き始めた初日、数日前まで小学生の教員であった私は、大学生を目の前に戸惑うことばかりでした。そんなときに前コーディネーターの関口さんがこう声をかけてくださいました。

「ここに来る学生はみんな真面目に生きて考えて悩んでいる。だからこそ、人の役に立ちたいと思ってボランティアセンターに来るの」。この言葉は今も忘れられずに心に残っています。

私には、キャンパス内の学生たちはみんなキラキラ輝いて見えました。首都圏の大学生は華やかで、悩み事とは無縁なのだろうと思っていました。ですから関口さんの言葉はにわかには信じがたかったのです。しかし、日が経つにつれてその言葉の意味がだんだんよく分かってきました。

「〇〇に見える」という思い込みはとても怖いことで、人間は多面体のようなもの、私から見えている部分のごく一部に過ぎなかったのです。大学生も小学生も同じじゃないか、みんな成長段階に応じて

悩んだり、もがいたり、笑ったり、泣いたり、失敗したりしながら成長していくのだと気づいたときに、少し気持ちが楽になりました。

関口さんはまた、「いろいろな学生がいるけれど、どんな学生もみんな愛おしい」とも仰いました。「愛おしい」というのはすごい言葉ですね。人に関心を持って、どれだけ真摯に向き合っていけるかという一つのバロメーターのようだと思います。どれだけ相手のことを真剣に考えられるか。それを私はこの仕事でやらなければならない、学生の人生に少しでもかかわる以上は常に学生を「愛おしい」と思って仕事をしていこうと決意しました。



初日について思い出すことがもう一つあります。佐藤課長がボランティアガイドをお持ちになって机の上に開かれたのですね。そこに書いてあったのが、「共に生きる」という言葉でした。課長は何もおっしゃいませんでしたが、この言葉についてしっかり考えてくださいと言われた気がしました。その日は帰った後もガイドを前に考え込んだことを今でも覚えています。

人はもちろん一人では生きられない。それは分かっている。でも、二十歳前後の若い大学生たちに、私はそれをどう伝えていけばいいのだろう。

悩み続けていたある日、大学の廊下で清掃の方がゴミを分別しているのを見かけました。丁寧にゴミを分別している傍ら、まるでその方がいないかのように無造作にゴミを投げていく学生が何人もいました。私はその光景に衝撃を受けました。小学校では、給食のストローと紙パックでさえ分別しないと叱られます。その数年後に大学生はどうしてこうになってしまうのか。他人が見えないのかな…そんな学生たちに「共に生きる」という言葉をどうアプローチをしていけばいいのだろう。悩みはさらに深まりました。

私は、実は最初から教育に関心があったわけでも、卒業後すぐに教員になったわけでもありません。むしろ大学の時には「先生には絶対になるまい」と思っていました。紆余曲折がありこうして教育現場で仕事をしておりますが、人生を遠回りした分、見えてきた景色もあります。

一つ言えるのは、人との関係において一番怖いのが「無関心」だということです。人を無視することは暴力よりも恐ろしい。ただ、残念ながら、世の中に対して、また他者について無関心な若者は増えていきます。このコロナ禍ではより、若者に限らず自分以外はモノのように感じている人もとても多くなってきているように感じています。

ボランティアで社会と向き合うときは、否が応でもいろいろな人と向き合わなければなりません。ときには嫌な思いもします。現場に行ったからといって、達成感や答えをすぐに得られるわけでもない。今はとても便利な時代で、スマホで「ググれ」ばさまざまなことが瞬時に分かりますよね。でも、スマホでググれない何かが見つかるのが「現場」なのです。そしてもしかしたら、答えはすぐ得られずに、5年、10年後にハッとすることにつながるかもしれない。そんな助け合って生きていく「種まき」こそがボランティアなのだと思います。



立教にはそんな体験ができる場を正課、正課外教育の両輪で支えてきた歴史があります。ボランティアは後者のプログラムで、活動の現場に参加し、体験を通して学ぶことと定義されています。立教の正課外教育で本当に素晴らしいのは、全てを職員と教員と一緒に協働して企画、運営してきたことです。学生と職員の距離が本当に近いということは、学生にとって非常に意味のあることだと思います。そしてボランティアセンターには長年にわたり継続して

きたプログラムがいくつかあります。

その中で私が印象深かったのは、高畠農業体験とバリアフリー映画上映会です。農業体験では6日間、学生と現地で共同生活を送ります。朝起こすところから始まって、常に睡眠不足で気の休まる時はなく、毎日が戦いです。それでも高畠の人の温かさと土の匂い、学生が朝から晩まで汗まみれで慣れない農作業に懸命に取り組む姿が励みになりました。何よりの喜びは、学生の表情がみるみる変わっていく様子を間近で見られることです。夜のふりかえりの時間で日に日に学生の言葉が厚みを増していくのですね。通り一遍の感想ではなく、胸の底からこみ上げてくるような話を聞くことができます。

人が学ぶ場所は大学のキャンパスや教室に限らないという、実は当たり前のことを改めて学生たちに教えてもらった気がします。バリアフリー映画上映会には5年間ずっとかかわってきましたが、個性豊かな学生が多く、一つの目標に向かうまでに動きが止まってしまうたり、ミーティングに来なくなる学生がいたりして、葛藤も悩みも山ほどありました。

そんな苦労も上映会当日、学生の表情がガラッと変わった瞬間に吹き飛んでしまいます。特にコロナ禍にあっては、「バリア」「壁」というものに関心がある学生が集まってきました。みんな社会に対して違和感を持ち、共に生きたい、生きてみたいと渴望しつつ、機会を奪われているのだなど、話を交わすなかで感じました。今年は例年に増して試行錯誤の一年でした。ワークショップも手探りの状態で始まりましたが、学生とのやりとりで私たちも学ぶところがありました。

プログラムに関わる中で考えさせられたのは、学生との距離の取り方です。手を差し伸べるべきか、あえて失敗させて見守るかの見極めが本当に難しい。冗談めかして「私は年の離れたお姉さんだと思って」と言ってきましたが、そんな大人がいてもいい、それくらいの距離でもよいのでは今は思っています。

私たちコーディネーターは、「みんな一人ひとり違っていい、人と比べなくていい」と言ってあげる存在でありたい。同時に、人と合わせなくていいけれど、相手を知ろうとする姿勢は大切だとも伝えたい。相手を知れば自分が分かるからです。

人が嫌いだろうと何だろうと、自分とは一生付き合っていかなければなりません。ときには自分の物差しが正しいかどうかで自信をなくすこともあるはずですが。そんなときに具合を確かめるため人は人とかわる。そうして支え合って社会が成り立っているのだということを少しでも示していければと考えています。

コロナ禍では特に人とのつながりが物理的に遮断され、社会はさまざまな歪みを残しました。自分と他人、首都圏と地方、見えない壁が立ちはだかり、自粛やマスクが当たり前の世の中になりました。この2年、学生の閉塞感、絶望、孤独はいかばかりだったかと胸が痛みます。こんな特殊な状況でコーディネーターとして何ができるのか。この2年間は迷い通しでした。

今年は幸い学生と対面で関わる機会が増え、今は逆に元気をもらっているようです。学生を支えたいと思ってきましたが、気がついたら学生に支えられていました。ここ立教で経験値を重ね、しっかりと力を発揮して還元してくれる学生たちを心から誇らしく思います。

私が授業で必ず伝えていることがあります。生で聞いた学生たち一人ひとりの言葉です。

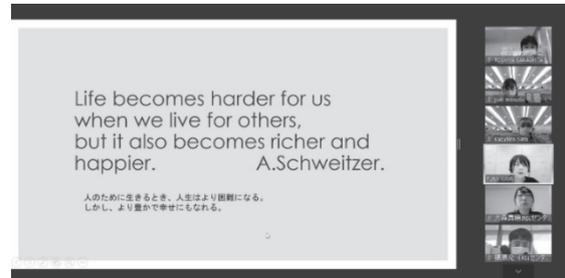
「自分の当たり前は、他人の当たり前とは違うことが分かった」、「幸せと思う軸はたくさんある。その人によって違う」、「今まで過ごしてきたのとは違う目線で社会を見ることに興味が出てきた」、「思いどおりにはならないことを学習する場だった」、「人との関わりから学ぶ、学ばされた」。

「ボラセン」は、ただボランティアを紹介する場ではなく、自分を知るための場であり、成功するためではなくて、失敗したり悩んだりしたときに戻る場所、充電的存在でもいいのだと個人的には思っています。

人生は遠回りでいいではありませんか。大学や社会の中には、ショートカットは素晴らしい、得であると思う傾向があります。「早い、短い」ことは正しく、成功のバロメーターのように捉える節もあります。でも、急行では見えない景色もあるのです。鈍行の普通電車でもいいし、時には間違っただけの電車に乗ってもいいのではないのでしょうか。

肝心なのは、そのときに見えた景色を忘れないでいること、経験や失敗を人に笑って語れるぐらい自分の中に落とし込むことです。

最後に、私が手帳に書きとめている言葉で話を締めくくります。ドイツの哲学者シュヴァイツァーの言葉です。「人のために生きるとき、人生はより困難になる。しかし、より豊かで幸せにもなれる」。立教での5年間で、私は人と関わること、つながりをつくることの大切さや尊さを学生から学びました。私自身もこの先どういう道に進むのであれ、この経験をしっかりと胸に刻んで歩いていこうと思っています。



福原 充 氏講演会

『立教サービスラーニングセンターでの5年間を振り返って』
～「歴史」を問い直し、今をみつめ、生きている「現場」から、「これから」をつくる～

日 時：2021年11月22日（月）10：00～11：10

場 所：オンライン開催 Zoom 使用

講 師：福原 充（社会連携教育課、RSL センター教育研究コーディネーター）

参加者：佐藤 一宏、阪下 利哉、廣瀬 かおり、増田 由紀、
内堀 勇二、大森 真穂、三浦 圭介

■初めての教育研究コーディネーターとして

立教大学に立教サービスラーニング (RSL) センターが誕生したのは2016年4月。私はその翌年の2017年4月にRSL センター初の教育研究コーディネーターとして着任しました。入職直後、創設期ということもあってか、ドタバタしている状況はありましたが、幸運にも全学共通カリキュラムをつくられた寺崎昌男先生とお話する機会に恵まれたり、チャプレンをはじめ、他の教職員の方から、立教大学はどのような大学なのか、ご自身が立教生だった時のお話、教職員として大学教育（学生）に関わる楽しさ等、様々お話を聴かせていただく機会を多く得ることができました。私自身も立教大学の卒業生の一人ではありましたが、このような時間は、改めて自分自身が「立教大学とはどのような大学なのか」、「大学の果たす役割とは何か」といったことを考える機会になりました。また、冒頭にお話ししたように、偶然にも、私はRSL センターで最初の教育研究コーディネーターとして着任したということだったので、自分の職種の役割や組織の中での位置づけなどを、新しく「つくっていく」ことや「位置づけていく」必要があったことも、この5年間特有のことだったのではないかと感じています。



■「建学の精神」とは何か？何を大切にRSL センターの理念を具現化するのか？

さて、RSL センターは、そもそもどのような意図を持って創立されたのでしょうか。立教サービスラーニング (RSL) の開講にあたり、2015年3月の全カリの「News letter」(No.37) に、当時の副総長であった文学部教授の西原廉太先生（現総長）は、「立教サービスラーニング (RSL) は、本学の建学の精神である「PRO DEO ET PATRIA」にもとづいて、正課外教育（フィールドエデュケーション）の伝統と先端の経験教育の理論と実践的知見を融合した、全人教育および専門性を深める実践的教育手法」であると述べています。また、立教大学のサービスラーニング (RSL) が特に実践するものは「経験を学修に接続する姿勢の涵養」、「協働と行動の技法の養成」、「社会の一員としての責任感の醸成」の3つであると記しています。

さて、着任当時の私は、サービスラーニングについて研究論文等からの多少の知識しかありませんでしたし、立教大学の「建学の精神」についてもあまりイメージすることができませんでした。そこで、入職後、まず立教大学はどんな大学なのか、その中で「R」がついた「SL (Service Learning)」では何を表現していく必要があるのか、個人としても考え、向き合うことにしました。RSL センターが立教大学の「建学の精神」に基づいて創設された組織であるということ、また、新しくできたばかりの組織で、私の役職は、前任者もない状況だったこともあり、自分が所属する組織が何を大切（軸）にして日々の業務

(現場)と向き合うのか、目には見えない「建学の精神」とは何か、私なりにより理解したいと考えたわけです。

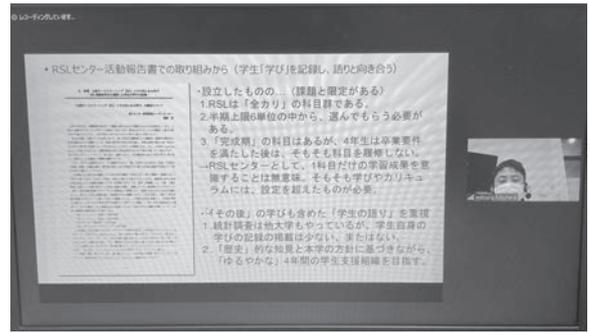
しかし、自分の母校でありながら、それまで立教大学が、または大学がどんな場所なのか、真剣に考えたことはほとんどありませんでしたから、なかなか困りました。そこで、私は自分が教育史に関心を持っていたこともあって、立教大学の歴史等から「建学の精神」を探る・考えることにしました。今も時間を見つけて時々調べていますが、幾つか過去の資料を調べるなかで、例えば、最近知って調べたものとして、私が卒業した文学部教育学科(1949年設置時は心理教育学科)では、1964年に初等教育課程の存続について議論されていたことを知りました。資料によれば、この教育学科の初等教育課程は、その起源として、聖公会関係のミッションの小学校の教師に新制小学校教諭の資格を与えることを意図してつくられたのですが、当時、その目的は果たされたのもう不要だろう等の様々な理由から廃止論が幾度か出てきていたそうです。ところが、当時の学科長であった、山本晴雄先生は、現在(当時)の国立大学は教科、授業のみに強い小学校教員の養成に終始して、教育者精神を育てていないのではないかと指摘し、その精神を涵養するにあたり立教大学のようなキリスト教系の私立大学の果たす役割は大きいと存続論を主張しました(『CHAPEL NEWS』第125号、1964年)。そのこともあってか、現在も立教大学の教育学科には、初等教育専攻が残っています。また、この時、山本先生は非キリスト教系大学の模倣はやめようということも言っています。つまり、私立大学として、また、教育機関としての独自性を出そう、大切にしようという意識があったわけです。

では、その独自性とは何か。山本先生が述べた二つのうちの一つは、キリスト教の精神に基づきながら社会的弱者に寄り添うこと。このような考え方は、「PRO DEO ET PATRIA」や「自由の学府」といった、本学の教育理念にも通じるものであらうと思います。もう一つは、専門性のみを極めた人を育てるのではなく、人道精神に基づき、広く教育学、社会学、心理学を身につけた小学校教員を養成することです。このことは、現在の全学共通カリキュラムと類似する考え方ともいえますし、本学が目指している「専門性に立つ教養人の育成」にも通じる考えであるといえるでしょう。もちろん、この事例は、立教大学にある一つの学科の歴史ではあります。しかし、重要なことは、今の立教大学だけでなく、当然といえば当然ですが、過去の立教大学も個々の組織で、また、大学全体でその時代の諸課題をみつめ、自分たちの在り方を議論し、未来を創っていこう、そういった理念を教育カリキュラムの中に組み込んでいこうとする姿勢があったことです。こうした、教育機関として、積み上げてきた一つ一つの「歴史」のなかに「建学の精神」はあるのではないかと…。「歴史」を「過去」のものとして扱うのではなく、常に批判的に問い直しながら「現在」、そして「未来」へつなげるための「遺産」として意識することが大切なのではないかと、調べていくなかで改めて考えるようになったわけです。そんなわけで、私は、この5年間、困った時は常に歴史や、そもそもの理念に立ち戻ることを自分の「軸」にしなが、 $R + SL = RSL$ の理念を具現化しようと心がけてきました。もちろん、理念だけではなく、現実にもどどのように落とし込んでいくのが重要なので、バランスをとることは、とても難しい作業でした。実際にどれだけ貢献できたのかはわかりませんが…。どうだったでしょうか?少しでも貢献できていれば、幸いです。

■学生の「語り」と向き合う。学生の「語り」から考える。

さて、この5年間の中での取り組みを一つあげて話して欲しいということで、様々、やらせていただけたのですが、今回は、記録としても残っているRSLセンターの活動報告書の取り組みをお話させていただければと思います。

RSLは全カリの科目群ですから他学部のように所属の学部生がいるわけではありません。また、RSLは、全ての学生に向けて授業を展開しておりますが、4年間をとおして学生の成長を見守ったりすることが学部より困難ですし、学生も全学で約6,000科目あるともいわれる科目の中から、15科目程度のRSL科目群を必ず履修してくれるわけではないといった現実があります。さらに、全カリで履修できる



単位の半期の上限は6単位であるため、1科目2単位で計算すると、学生は半期で3科目しか履修できないこととなります。この学生が選ぶ3科目のなかの一つに RSL 科目を選んでもらう必要があります。そもそも「全学的に開いた科目」とはいつでも、教室の収容人数等の事由も含め、すべての科目に定員は存在しているため、「運営規模」にも一定の限界があるわけです。その他、卒業要件を満たした4年生はそもそも科目を履修することが少ないといった、課題もあります。

また、これらの課題とは別に、私は、1科目だけで RSL センターが目指す成果を捉えることは避けたいとも考えていました。そもそも学びやカリキュラムには運営者の設定をも超えた意図せざる結果があるほうがおもしろいですし、決められた設計の中だけで学生の学びが完結するのは、どうなのだろうと…。大学には RSL だけでなく様々な授業や学びがあるわけですから、RSL センターとしては、履修者の確保は大切ですが、一方で、4年間の学びの総体から学生を捉えようとする視点が重要だと考えていました。立教大学が正課教育だけでなく、正課外教育を学びの体系のなかに位置づけている意味もそこではないかと私は理解しています。少し前置きが長くなりましたが、一言でいえば、様々、条件があるなかで、RSL センターは学生とどのように継続的な関わりも含めた関係性を築くのか。このことが自分の中で一つのテーマになりました。

そこで、一つの企画として、毎年発行する RSL センターの活動報告書の中で、履修後も含めた、学生の「自分語り」を重視しようと考えました。この取り組みには、私自身の経験や日本の教育史の教育実践の一つである「生活綴方」などからも影響を受けています。

私は、RSL の実践系科目を受講した学生に声かけをし、面談を複数回重ねながら、①科目を履修する前に考えていたこと②科目を履修して気づいたこと・考えたこと③履修後にどのような変化があったのか・なかったのか。何をしたいと思っているのか・何をしているのかといったこと、他の科目と RSL 科目のつながり等について、一定程度の「量」も意識しつつ、8,000 字程度でしょうか。添削等もしながら学生に書いてもらい、それを報告書に「学びの記録」として毎年掲載することにしました。サービスマーケティング等の経験学習では、授業のなかでのリフレクションが重視されたり、最近ではループリックを用いた授業の学習目標・達成度を判断する等の取り組みがありますが、この報告書は、授業後のリフレクションとして位置付けようということも意識していました。

また、統計的な調査や研究は全国的に行われていますが、学生自身の学びを文字として、また、論文やレポートでもない、生活の記録、学びの記録という形で、文字数もある程度多く設定して記録に残す例は、他大学の報告書等を確認してもないように思われましたので、他大学にはない、RSL センターの特徴にもなるのではないかと考えたわけです。

実際に学生と面談をし、文章の書き方についてやり取りをしていく中で、ゆるやかなものではありませんが、学生と報告書執筆後も含めた継続的な関係性を築くことができたように思いますし、学生たちからも「書いてよかったです」、「自分の考えを整理できました」等のコメントをもらえたことはよかったですと感じています。私も等身大とっていいのでしょうか。現在の学生の姿から多くの気づきや学びを得ることができました。また、実際に完成した学生の文章を読んでもみると、学生を1科目だけで捉えようとするのではなく、4年間という時間やその先の学びも含めて捉えることが重要なのだと、学びとは重層的なものであることも改めて学ばせてもらいました。

そして、学生を囲うのではなく、RSL センターは全学的に科目を展開する組織であるからこそ、ゆるやかに学生の生活を見守る場、共に考え、成長する場として、「ゆるやかな学生支援」を展開する組織であるとよいのではないかと考えたことを持つようにもなりました。また、このことは、立教大学が大切にしてきたとされる「学生支援（学生助育）」もそうなのではないかと感じています。

■最後に…

私は、RSL センターのような体験型の教育プログラム・学内外の様々な方と協同する教育プログラムは、注意しなくてはならないことが大きく分けて三つあると学ばせていただいたように思います。一つ目は、「現場」に関わる組織であることの裏返しとして、その意味を常に批判的に問い直すことに自覚的であることです。「教育」はチャレンジングなプログラムです。「現場」の影響力は強いいため、少し気を抜くと、批判的にみるのではなく、決まった方向へ誘導する装置になりかねません。批判的な視点をどう維持し、「現場」とバランスをとっていくかが問われることを私は学ばせていただきました。二つ目は、学びの場となる「現場」には、実際にそこで生きている人たちがいるということを大切にすることです。私

たちは「(立教) 大学」という教育機関だからこそ、ある種、苦勞なく現場の人と一緒にプログラムをつくることのできる機会を得られるわけですが、だからといって現場をないがしろにすることがあってはなりません。私も現地の方から様々、お言葉をいただき、失敗もしながら学ばせていただきましたが、そこに生きている人たちを尊重し、範囲を見極めながら真摯に向き合うことが本当に大切だと考えています。三つ目は、RSL センターのように、「建学の精神」や設立時の理念の中で組織された機関を大学という教育機関のなかでどのように育てていくのかということです。今後は創立期だった時期を終え、RSL センターはいろいろと組み変わっていくでしょうし、必要の是非は他の事例のように、時代に応じて問われていくのだと思います。どのような道をたどるにせよ、常に理念に立ち戻りながら、真摯に「あり方」を模索し、取り組んでいく組織であって欲しいと、RSL センターで様々なことを学ばせていただいた一人としては願っています。

最後に、私は母校である立教大学にもう一度帰ってきて、スタッフとして働くことができるとは考えてもいませんでした。このような時間をいただけたことに心から感謝しておりますし、この5年間の全ての出会いと経験、学びに感謝しています。これまで学んできたことを活かしながら、私個人としても次の場所でも種をまき、また、種そのものになって、そこで生きる人々と共に育っていけるよう、精進しなければと感じています。本日は、このような場をいただきまして、誠にありがとうございました。



筒井 久美子 氏講演会

『東日本大震災後の10年』～失われたものとの共存～

日 時：2021年11月15日（月）10：00～11：10

講 師：筒井 久美子（社会連携教育課 東日本大震災復興支援・陸前高田サテライト担当）

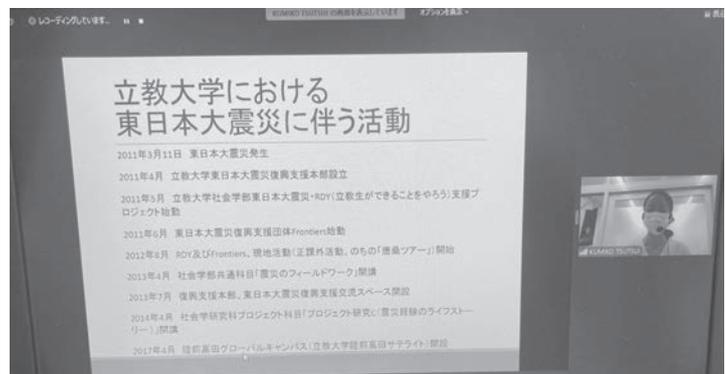
参加者：佐藤 一宏、阪下 利哉、廣瀬 かおり、小幡 彩子、茅 英美、増田 由紀、
大森 真穂、中島 紀之、三浦 圭介

私は大学院でしていたことが今の仕事につながっていますから、その頃のことからお話します。始まりは、2011年3月11日に起こった東日本大震災でした。立教大学はいち早く支援の活動に動き出します。当時、私は社会学研究科の大学院生でしたが、5月には所属の社会学部で「東日本大震災・RDY（立教生ができることをやろう）支援プロジェクト」が始まりました。また、6月7日には学生復興支援団体のFrontiers、Three-Sが始動します。2012年になると、このRDYとFrontiersが連携して現地活動を開始しました。2013年4月に社会学部の共通科目「震災のフィールドワーク」が開講されます。同年7月には立教大学復興支援本部が東日本大震災復興支援交流スペースという場所を開設しました。2014年4月になると、社会学研究科のほうでプロジェクト科目「震災経験のライフストーリー」が開講します。そして2017年4月に、立教大学がサテライトと位置づける陸前高田グローバルキャンパスがオープンしました。震災が起きて5年、その後こちらに来て5年は、この一連の活動に携わりました。

東日本大震災発生当時、私は自分の研究も進まずに悶々とする日々を送っていましたが、不思議なことに何かしなければという思いに突き動かされました。お金はないけれども時間はあるし、特に誰かを守らなければならないという立場でもない。自分のような者が何かしなければと思いました。そこで、現地で活動するあるボランティア団体の説明会を聞きに行きました。当時の厳しい状況を考えれば当然ですし、後から、本気で活動できる人を見極めるためのふるいだと知のですが、参加のハードルがとても高かったのです。現地へ連れて行ってはくれるけれども、食料や寝床は自分で確保してほしい、というのが参加の最低条件でした。行く気満々でいたのに出鼻をくじかれ、結局、参加することができなかった自分にもショックを受けました。そんなときに、指導教授から、学生たちが活動を立ち上げるからサポートに入ってくれないか、とお声がけいただきました。私は学部生とかかわったことがほとんどなく、人見知り、自分から活動を起す経験もなかったのに、正直、行動するのは怖かったです。でも、目をつぶって飛び込む気持ちで活動を始めました。

RDYやFrontiersが現地で直接、活動を始めたのも学生の声がかかってでしたし、気仙沼の唐桑町への支援「唐桑ツアー」が始まったのも、個人的に先に現地入りしていた学生のつながりでした。Frontiersの活動は、震災直後は、出来事が大きすぎて自分がかかわっていいのかわからない、自分のような者が支援などおこがましいのではないかと躊躇していた学生に、活動への入り口を提供しました。

学部、大学院それぞれで開講した科目は、岩手県大槌町と陸前高田市、宮城県気仙沼市唐桑町に行って、被災を経験した方と関係を構築した上でライフストーリーインタビューというものに協力していた



だき、それを学生各自の関心に従って報告書としてまとめていくとともに、語りを文字起こししてアーカイブしていくという授業でした。私はここでもお声がけをいただいて TA として授業に参加し、事前指導、現地活動、報告書執筆というプロセスに関わることとなりました。この科目を履修した学生たちが、正課外の唐桑ツアーに参加して現地の方々と関係を継続したり、逆にツアーに参加していた学生たちが授業を履修してアカデミックなアプローチを学んだりと、正課・正課外が互いにより影響を及ぼしながら活動の仕組みをつくりあげていったように思います。



そのなかで一つ印象に残っていることがあります。「震災のフィールドワーク」立ち上げにあたり、2012年にプレ的に行っていたゼミ活動で訪問した大槌町で出会った女性のお話です。大槌では震災当日に大きな火災があったのですが、当時はメディアの人たちが大槌まで入ってくるのができませんでした。彼女は、火災があったことが、誰にも知られなくて悔しいとおっしゃっていました。そのときには、そういうものなのかと思っていました。しかし、毎年、大槌町に足を運ぶなかで、彼女の言葉の意味を考えるようになりました。壊れた建物が取り壊され、空いた土地が草で覆われ、そこに新たな建物が建てられ、町はどんどん変貌を遂げていきます。しかし、例えば2015年に初めて大槌を訪れた学生は、2012年の大槌を知りません。これだけ大変なことがあったのに、当時のことを知らない、そのまま見過ごされてしまいます。彼女が悔しいとおっしゃっていたのは、このような感覚に近かったのかもしれないと思いました。そこで、それまでは、被災した地域で写真を撮るのは失礼なのではないかと思ひ、撮ることができなかったのですが、写真を撮るようになりました。また、現地で見聞きしたことを学生たちに積極的に話すことはしてきませんでした。活動のなかで序列をつくりたくなかったというか、回数多く現地を訪問している者が偉いといった雰囲気があったからです。でも、知ってしまった以上は、伝えなければならないのではないかなと思うようになりました。

また、「震災のフィールドワーク」を履修したFrontiersの学生の気づきが唐桑ツアーを変えていくことになりました。2013年に受講した学生が、地元の方の話を講演会形式で聞き、事前に決められた場所を見て回るのと、この授業のように少人数でお話を伺い、話が盛り上がり時間を延長したり、お話しと関連する場所を訪れたりするのでは、質が違うということに気が付きます。それまでの唐桑ツアーは現地団体の活動に参加をしていたのですが、この気づきを受けて、独自に活動をつくるようになります。その結果、学生たちは「東北」や「被災地」を訪れる、「被災者」に会うという感覚から、「唐桑」に行く、〇〇さんに出会うという感覚へと変わっていき、卒業後も個人的に唐桑ツアーで訪れた場所を訪ねる学生も出てくるようになりました。

私が学生と関わる中で心がけていたのは、できるだけ「暇そう」に見えることでした。自ら引っ張って学生を鼓舞する方法もありますが、それよりは困った学生がいつでも気軽におしゃべりレベルで相談ができる人でいたいと思っていたのです。基本は待ちの姿勢で、ここは動かなきゃまずいかなというときにだけ、ほんの少し動く。しかし葛藤もありました。例えば、唐桑ツアーは学生が企画し、先生方にご相談に行くのですが、質問攻めにされて、しょげて帰ってくる。先生方からも学生への期待の声が届きます。戦うのは学生たちと先生方で、自分はそれを見守っているだけなのではないかと思っていました。

陸前高田グローバルキャンパスでは事務局とコーディネート業務を担いました。実はこの事業も、かかわる前までは懐疑的にとらえていた部分がありました。例えば、現地で開催している野球やバレー教室は、たった1日のかかわりに本当に意味があるのだろうかと思っていました。しかし、実際に関わることで考えが変わっていきます。ケガにより目標を見失っていたがそんな自分をかえりきかけにしようと野球教室に参加したという学生がいました。彼は教室に参加した中学生から将来の夢を聞かれて「野球選手」と答え、そう答えることでどんな形でもいいから野球にかかわり、努力を続ける決意を固めたといいます。また、中学校の先生方から、来年はぜひうちの中学校のグラウンドでやってくださいと声掛けをいただいたこともあります。このように、実際に関わり、学生や現地の方々の声を聞くことで活動の意義

を感じる事ができました。

この10年は東日本大震災の風化の過程だったと思います。以前は、記憶の継承に取り組む意味が分からなかったのですが、忘れられていくのを目の当たりにすると、東日本大震災という出来事に多少なりともかかわり、知ってしまった立場からすると伝えなければならないのではという思いになります。活動を継続することは、個人的な思い入れや趣味として還元されがちです。確かに震災直後とは違う状況の今、復興支援という言葉自体に違和感があるのかもしれませんが。私自身、事前指導で被災状況を伝えているとき、いつまでも被災地として扱っていいのかと疑問を感じていました。ヒントをくれたのは、今年（2021年）の3月11日に気仙地域の地元紙・東海新報に載った高校生の作文でした。「20年後のふるさと気仙」というテーマに向けてその子が書いたのは、「失われたものと共存できるまち」。大切なのは震災経験といかに共存するかだ、それがやがて自分たちのまちを守るだけでなく、いつかどこかのまちを守れるのではないだろうか、といった内容に、この先のかかわり方が見えてきたように感じました。かの地はもう被災地ではないかもしれないけれども、震災を経験し、それがまちを構成する大きな一要素であることに間違いはありません。震災を全く扱わないのではなく、前面に出すのではなく、失ったもの、マイナスのところも共存しているまちと関わり続けることができるとよいのではないのでしょうか。



座談会～立教大学の社会連携教育のこれまでとこれから（現場からのメッセージ）～

日 時：2021年11月29日（月）10：00～11：30

場 所：池袋キャンパス5号館会議室 ハイブリッド形式（オンライン Zoom 使用）

参加者：茅 芙美（社会連携教育課、ボランティアコーディネーター）

：福原 充（社会連携教育課、RSL センター教育研究コーディネーター）

：筒井 久美子（社会連携教育課、東日本大震災復興支援・陸前高田サテライト担当）

進行役：阪下 利哉（社会連携教育課）

視聴者：佐藤 一宏、廣瀬 かおり、小幡 彩子、増田 由紀、内堀 勇二、大森 真穂、小野 真彩、
高山 智大、三浦 圭介

■軸を問い続けていく

阪下：今日は、ボランティアセンター（以下、ボラセン）、RSL、東日本大震災復興支援・陸前高田サテライト（以下、サテライト）それぞれの現場で5年間活躍されてきた皆さんの知見と経験を引き継ぎ、今後の発展の基礎資料として残していこうという趣旨でお集まりいただきました。まず、業務のなかで一番大切にしてください。

福原：私が携わってきたサービスマーケティング（SL）はあくまでも一つの教育手法です。立教大学（RSL）では、4年間をとおして、学生に市民性を涵養するシティンシップ教育を展開し、実践するといった目標を掲げています。私は、この目標を実際の教育現場の中でどう実現していくのかを RSL センターに限らず、関係者全員で議論し、実践していくことを大切にしてきました。立教大学では現在、全体で約 6,000 科目を開講していると聞いています。その中で立教サービスマーケティング（RSL）の事業を考えたときに、学内にある、インターンシップ等の体験型教育プログラムとの差別化も意識するように心がけてきました。本学に限らず、大学では、様々な理念や目的から教育プログラムが展開されていますが、これからも自分たちの事業は何を大切にする場所なのか、他との違いは何かといった「軸」の部分で議論していただきたいですし、それがあって初めて、理想とする正課・正課外教育の協力連携といった部分にもつながっていくのだらうと思います。もう一つ付け加えるなら、ボランティアセンターをはじめ、正課外教育を展開する部署の役割ですね。今は全国の大学でボランティアセンターはありますし、また、新しくつくり、地域連携しましょうという流れがあります。立教大学のボランティアセンターは、単に学生にボランティアを紹介するだけではない、学生支援（独自の「学生助育」）という姿勢で取り組んできた歴史がある。では、そこで行われる正課外教育は何なのか。RSL のような正課教育とともに常に問い続けることが大事だと思います。

茅：私自身や、また周囲と一緒に仕事をしてきた方たちが大切にしてきたことは、ボランティアセンターの原点である、「共に生きる」という言葉にこだわりを持つことです。今、福原さんからもあったように、ボラセンが正課外教育をする意味を私たちスタッフ自身が常に考えていないと、ただの「ボランティアを紹介するだけの部署」になってしまっていて、極端な話、人間がなくなってもいい、AI でもできるものになってしまう可能性もあります。

私たちコーディネーターが生身の人間として、学生に伝えていかなければいけないことは何かを日々話し合い、時には悩むことが重要だと考えます。そのうえで教育現場であることを常に意識しながら、学生にはボランティアの現場で感じたことを他人事ではなく、自分事として受けとめてほしいと願って接しているつもりです。たとえば志を同じくして集まった学生もそれぞれまるで個性が違います。一人ひとりに合った声のかけ方や寄り添い方で成長の支えになっていければと考えています。

コロナ禍では、活動が制限されて気持ちをくじかれてしまった学生たちにどう接するかが大きな課題で



した。ボラセンにとどまらず、RSL やサテライトとも情報共有しながら全体で見守る体制をつくっていく必要があります。

筒井：サテライトの役割は、社会連携教育だけにとどまらず、学部の正課、正課外活動のサポートをしたり、先生方の研究、また研究者を地域につなげていく、また、地域貢献として地元の方向けの教育の場をつくったり、交流拠点を運営したりと、研究と教育と社会貢献の3つの柱がある仕事です。そしてサテライトも、茅さんのお話の中に出てきた「共に生きる」が理念となって立ち上がってきたものです。この言葉を私なりに考えると、学生を現場につないでいき、そこに生きている人たちと出会ってもらおうこと。そういう場を開くのがサテライトに求められているのだという姿勢で携わってきました。

■連携することでみえてきたもの

阪下：お互いに近い距離にあり、連携や情報共有がしやすい関係にあることが、学生を支えていく上で重要な意味を持ちそうですね。

福原：RSL センターは、センターという名がつけられていますが、センターは文字どおり、一つの中心（中枢）であり、また、発信していく場なんですね。ボランティアセンターは正課外教育を含んだ情報を、RSL センターはシティズンシップ教育をサービスラーニングという手法を活用して展開していくことを、サテライトは大学の方針に基づいたプログラムの実施を、全学に発信していくわけです。「内」と「外」の両輪が合わさって初めてセンターは機能するのだと思っています。そういった意味では、さまざまな視点と組織を持ち、「社会連携教育」という名の下に事業を展開していることは、本学の強みなのかもしれません。業務での具体的な連携については、個人の善意や気持ちに頼るのではなく、全体で見取り図を共有し、役割を適切に振り分ける仕組みと構造をつくるのが円滑な運営（人が変わっていくなかでの）の鍵だと思っていますし、意識してきました。

茅：私は新座キャンパスですので、普段は直接関わる機会はあまりないのですが、福原さんや筒井さんとの雑談の中で得たヒントを持ち帰ってボラセンで試みるといったことはよくあります。コロナ禍で在宅勤務が増えると、そこが欠けてしまう状況になり、あらためてとりとめもない雑談の大切さに気づきました。普段の何気ない話からもいろいろな発想が生まれたり、情報共有ができていたのだということです。

コーディネーターは時として「個」や「オリジナリティ」を発揮することが求められますが、抱え込む必要はないわけで、常に情報共有したり、垣根を越えて相談できる体制があるのがよいと思います。

筒井：ボラセンやRSLは学生がよく来る部署ですから、学生の様子を共有していただくことができました。必要があれば互いの部署ですぐに学生を紹介し合える環境は素晴らしいと思っています。近くにいると業務状況がわかったり、何となく漏れ聞こえてくる会話から、取り組んでいる課題や、今忙しそうだから時間を置こうとか、逆に暇そうだから話しかけてもいいかなという具合に、雰囲気をつかめるのもよい点ですね。先ほどサテライトは三本柱で走っていると申しましたが、そのように整理できたのも、正課のRSL、正課外のボラセンと情報交換をしながら仕事を進めることができたからです。

阪下：社会連携教育に関するホームページが立ち上がり、情報共有のプラットフォームが強化されつつあります。ここからどう発信していけばよいでしょうか。

福原：誰に向けた何のための広報かをまず整理したほうがよいと思います。立教生に向けたもの、広く一般に大学を知ってもらうためのもの、教育機関としての理念や成果を教育関係者（研究者等）に伝えるものとは意味合いが異なると思います。その上で、ウェブ、ソーシャルメディアといったツールに応じて伝える情報の深度を変えていくという使い分けが必要になるでしょうね。



筒井：それぞれがそれぞれの対象に向けたツールを持って発信している現状をどうつないでいくかが重要だと思っています。人と情報のマッチングという意味では、学外向けか学内向けかという交通整理も必要ではないでしょうか。

高山：ウェブサイトの構築に関わった者として感じたのは、扱う業務が幅広いというのは社会連携教育課の強みですが、情報発信の面からは弱点になりかねないということです。広報でも青写真を設計して共有し、一つ一つ区切りを付けて発信できるといいのではないかと思います。

■社会と教育をむすぶ拠点として

阪下：それぞれの立場が明確になり、連携が図られているからこそみえてくる改善点があるのではないのでしょうか。

福原：ボランティアセンター、RSLセンター、サテライト等、それぞれ定型の業務があるわけですが、決まったものを実施していくことに加えて、それぞれの活動にどういう意味があったのかをその都度、全体で共有するための「ふりかえり」は、その年度の事業目標とともに必須だと考えます。当然、学生に求めているだけでなく、私たち教職員も自分たちの体験・経験・成果を言語化し、見える化することが求められるわけですが、こういった作業の中で自ずと足りないものや重複するものがみえてくるはずです。良い意味で組織を効率化していけないのでしょうか。また、正課・正課外教育に分かれて活動するだけではなく、その間を「つなぐもの」をどうつくっていくか。学生のみならず、地域の方、関わってくださった方々を含めた「ふりかえり」は、それぞれの業務の位置づけや継承にもつながりますから、手間を惜しまずにしていくべきだろうと思います。

茅：今のお話は耳が痛いですね。経験のふりかえりや言語化の大切さは、私たちが普段、学生によく話していること。学生に伝えるだけでなく、私たちスタッフも同様です。今あらためて理念に立ち返る意味でも「ふりかえり」は大事な過程だと思いました。

またコロナを経て、これからボランティアの形は変わらざるを得ないでしょう。ただできないことにこだわるのではなく、じゃあどんな形ならできるのかという柔軟な発想が一層求められてくるのだろうと思っています。それは学生だけでなく我々スタッフ側ももちろんです。

筒井：お二人のおっしゃる通り、私もふりかえりをするのは重要だと思っています。一方で、人や時間が限られる中で、ふりかえりにまで手が回らないという声も聞かれます。ですので、「やるべきこと」と「できること」のバランスをいかにとるのが課題だと思っています。この点についても話す機会が作れるとよいのではないのでしょうか。

福原：理念や建学の精神に立ち返る姿勢は常に持つておくものとして、これらは目には見えないものだけに、実践にあたっては柱立てが必要になりますよね。それをするのが組織だと思うのです。ただ、理念や精神といったものの解釈は十人十色で変わってくる可能性がある。だからこそ、教育機関として、また、組織として意思統一をしておくことが大切だと考えています。理念や精神を前のめりに掲げることも問題ですから、どのように現実に落とし込むのかということを考える意味でも、理念などに立ち戻る姿勢とそれを実現するうえでの冷静な視点や判断について、日ごろから皆で協議することが重要だと思います。また、もう一つ慎重に進めたいのは地域の方との関係構築です。時間と労力のかかることですし、丁寧にやっていく必要がありますから、コーディネーターだけの判断ではもちろん無理ですよ。それこそ教職協働、総出の体制が必要だと考えています。

茅：外部の団体さんとのやり取りで継続性が難しいなと感じています。ボラセンは年度更新という形でお願いをしていますが、コロナ禍の中で連絡の滞ることもあり、疎遠になってしまう団体もあります。変化に合わせて新しいフィールドをどんどん広げていくことも大事ですけども、既存の団体とどう関わっていくかも大切にしていけるべきではないかと思います。時間も労力もかかることなので、現場だけではなく、ぜひ専任職員の方にも積極的に関わっていただきたいです。

筒井：マッチングもすればいいというものではないと思います。つないだはいいけれども、受けとめきれないとか、違うニーズが出てきて合わなくなってしまう可能性もあります。学生団体をどこまでサポー



トするかという問題はありますが、アフターケアも視野に入れる必要があるかもしれませんね。研究者がつながるときには、専門性が高すぎて、地元のニーズを超えて応えようとしてしまうこともあるので、その間をうまくつなぐ機能は必須だと考えています。

佐藤：皆さんのお話を聞いて二つのことを感じました。まず、立教大学は「社会連携教育」をどうするかを考えるより先にボランティアセンターができ、それから約十数年たって RSL ができ、現在の課が創設されたのは 2016 年のことです。だんだんと体制が整ってきたという経緯を踏まえ、ここからは一つの課として「社会連携教育」を捉えていく第二ステージに入ったのだらうと思います。

もう一つ、この課はボラセンと RSL を一緒にして正課教育と正課外教育の連携を図って立教ラーニングスタイルを具現化するところからスタートしてきたわけですが、お一人お一人のお話から、現場がどういう気持ちで動いてきたかを改めて実感することができました。課としてはもちろん、理念や目的、方向性、学生や大学の状況と随時、照らし合わせながら臨機応変に対応してきたつもりです。こうして新陳代謝を迎える今このときに、それぞれの言葉で思いを表明していただけたのはまたとない機会でありました。あとは受け継ぐ私たちがきちんと受けとめて咀嚼し、次のステップへつなげていく役目をしっかりと果たさなければならないとの気持ちを新たにいたしました。貴重な機会をありがとうございました。お三方のこれまでのご尽力に感謝するとともに、今後のご活躍をご祈念いたします。

総長室社会連携教育課長インタビュー

『立教大学の社会連携教育のこれまでとこれから（社会連携教育課設立の経緯と中長期的展望）』

総長室社会連携教育課長 佐藤 一宏



略歴

1984年4月立教大学職員 教務部理学部教務課
1987年4月学生部学生生活課
1999年4月総務部人事課
2004年4月学生部学生生活課
2011年4月キャリアセンターキャリア支援課
2015年4月学生部ボランティアセンター
2016年4月総長室社会連携教育課
現在に至る。

Q 1. 総長室社会連携教育課の仕事の内容について説明してください。

大きく分けて、以下の4つの仕事になります。

- ① 立教サービ斯拉ーニング(RSL)センター
講義系科目、実践系科目の授業支援、履修に係わる学生相談、実践系科目の受入先機関との折衝等
- ② ボランティアセンター
学生へのボランティア活動に関する理解の促進、啓発、指導助言、ボランティアセンターが主催するプログラム、キャンプ、授業等の企画・運営、学生ボランティアサークル等の支援等
- ③ 社会連携系事務室
陸前高田サテライト、復興支援、社会地域連携、SDGS、産学連携等
- ④ 立教セカンドステージ大学
50歳以上のシニア層を対象として「学び直し」「再チャレンジ」と「異世代共学」をサポートするために開設した新しい学びの場の支援業務

Q 2. 多くの業務が様々な窓口で行われていますが、どのような経緯で設立されたのでしょうか。

総長室社会連携教育課は2016年4月に設置されました。今年で6年目を迎えます。

正課教育の立教サービ斯拉ーニングを全学共通科目の中に開設するために、正課外教育のボランティアセンターと一緒に運営していく組織が前提となっています。

理念的な統合の意味合いもありますが、一方で、小さな組織が一緒に協力・連携を推進していくことで、少しでもスケールメリット(人員削減)を生み出したいという事情があったことも事実です。

加えて、当時の総長室教学連携課が解体し、立教サービ斯拉ーニングセンターとボランティアセンターを一緒に運営する組織に、社会地域連携、陸前高田サテライト・復興支援、産学連携等を担当する部署が加わり、新たに社会連携教育課としてスタートすることになりました。2019年4月からは、立教セカンドステージ大学が加わり、現在の体制となっています。

現在は、池袋キャンパスに事務室が3か所、新座キャンパスに事務室が1か所設置されており、管理職2名を含む専任職員が7名。教育研究コーディネーターが2名。ボランティアコーディネーターが2名。地域連携コーディネーターが1名。事務嘱託・派遣職員が3名。業務委託が3名の合計18名の体制となっています。

Q 3. 正課教育と正課外教育を同じ窓口で業務を行うメリットは何でしょうか？

正課教育と正課外教育の両輪で学生の4年間を支援するという方針は、立教大学の教育の仕組み(枠組み)である「RIKKYO Learning Style」(以下、RLSと表記)の柱の重要な要素となっています。

立教ラーニングスタイルは、立教大学で学ぼうとする学生が、将来なりたい自分を思い描き、その目標に向かって自律的にそして着実に学び進めることができる、新たな学びのスタイルです。

入学から半年間かけて、全ての新生を対象に行われる「立教ファーストタームプログラム」にはじまり、グローバルリーダーに欠かせない力を身につける「グローバル教養副専攻」、そして少人数をベースに進められる言語教育などとともに、正課教育と創立以来立教の伝統でもあるボランティア活動や立教キャンプなどの正課外教育の両輪で学生を支援するという、140年以上にもわたってリベラルアーツ教育を実践してきた立教ならではの視点が、いたるところに生かされています。

日本には国公立を含め数多くの大学が存在していますが、「正課」と「正課外」の両方で学生の学びを支援するという教育方針を打ち出している大学は立教大学のほかには見当たりません。つまり、立教大学独自の特色であるということが出来ます。

立教サービ斯拉ーニングは「正課教育」の実践部局、ボランティアセンターは「正課外教育」の実践部局ですが、その2つが同じ事務室で、共通の理念で運営し、学生支援を行うことは「正課教育」と「正課外教育」の往還、つまり立教ラーニングスタイルの実践、具現化の場であるということが出来ます。

立教サービ斯拉ーニングなどの科目で社会の課題や現実に触れ、もっと関わりたいと思った学生はボランティアセンターを活用することで、さらに体験を広めたり、深めたりすることが出来ます。

また、ボランティア活動で現場に出会い、社会の課題に触れた学生は立教サービ斯拉ーニングをはじめとする様々な正課教育の科目を通して、その実態をより深く知り、分析し、行動に移していくことができるという意味で、「正課教育」と「正課外教育」の往還の場となっており、そのことが学生の人間的な成長にも寄与すると思っています。

【学生の事例】

- ・RSL ローカル(陸前高田)の授業を履修した学生が、継続して考えたいとボランティアセンターを訪れ、学内の震災関連の学生ボランティアサークルを紹介され、入部して、その後何度も被災地を訪れ、そこに生きる人たちとの関係性を重ねながら、自分自身の問いを深掘りしていった。
- ・RSL ローカル(南魚沼)の授業を履修した学生は、ボランティアセンターが募集しているポール・ラッシュ博士記念奨学金を活用して、仲間を募り、年に数回南魚沼の栃窪集落を訪れ、現地の人々との相互交流を重ねていった。
- ・ボランティアセンター主催の農業体験 in 山形県高畠町に参加した学生は、早々に大手企業から内定をもらっていたが、有機農業を基軸に食といのちを大事にしながら生きている方たちに接して、今一度自分の進路を考え直し、地方の活性化、地方創生に関心を持った。その後関連する授業を履修しながら、公務員試験の勉強を猛烈に頑張った末地方公務員に合格し、現在まちづくりに貢献している。

このような学生たちだけでなく、社会連携教育課が設立してから6年間にいろいろと頼もしい話が生まれており、その意義は確かに根付いてきていると実感しています。

Q 4. 総長室社会連携教育課で働く職員に求められること、期待することは何ですか？

総長室社会連携教育課は、学生のみならず、社会に対して開かれた部署であります。

学生と社会をつなぎ、学生が社会や世界の課題や問題を他人事ではなく、自分事としてとらえ、自分なりに向き合い、考えながら生きていくことができるような支援と関わり方が求められています。

その意味から、社会連携教育課で働く職員に求められることは、

- ① 社会や世界、そして大学の動きに関心を持ち、社会連携教育課の仕事と結びつけて考えるアンテナを持つこと。
 - ② 学生の成長、そして取り巻く社会状況にも関心を持ちながら、今できることは何かを考え続けること。
 - ③ これ以上小さくできない最小限の組織でもあるため、一人ひとりが働きやすく、協力連携しやすい環境を整え、円滑なコミュニケーションを心掛けること。
- 今、社会連携教育課で働いてくださっているみなさんが日々実践されていることでもあります。

Q 5. 今後の立教大学の社会連携教育について、中長期的展望などをお聞かせください。

社会連携教育課が設立して6年が経過し、設立期から第2ステージに移行する時だと感じています。

前述した、①立教サービスラーニングセンター、②ボランティアセンター、③社会連携系事務室、④立教セカンドステージ大学とも取り巻く状況は変化し、様々な対応を迫られています。

また、社会連携教育課は対象となる範囲が広範であり、何でもかんでも仕事として関連してくる可能性のある部署であり、対応が大変だと思っています。

西原総長の中期計画の中にも、望ましい社会連携教育課の組織の検討という課題が挙げられていますが、ぜひ積極的に検討を進めて、望ましい組織のあり方と持続可能な組織運営を考える必要があると思っています。

その際に、「社会連携教育」(立教サービスラーニング・ボランティアセンター)と「社会連携」(社会連携系事務室)のすみ分け=独立を行うのか、それとも「大社会連携教育課」の中に「社会連携教育」と「社会連携」を並立させるのか、という課題や、社会連携とは領域が異なると思われる「立教セカンドステージ大学」の取り扱いをどうしていくのか?など、現場だけではなかなか判断がしにくい、政策的な課題や問題については、西原総長をはじめとして、執行部および関係者・有識者が英知を結集して、方向性をしっかりと指し示していく必要があると思っています。そのために現場からの協力は惜しまないつもりです。

最後に、西原総長は立教サービスラーニングをさらに発展充実させ、立教大学の教育の根幹にしていきたいとおっしゃっています。

また、多くの教職員やチャプレンもボランティアセンターや立教キャンプなどの正課外教育プログラムは、建学の精神が具現化された立教大学の特色であり、継承していくべき財産であるとおっしゃってくださいます。

私たち社会連携教育課に勤務する者は、そうした思いを胸に秘め、誇りに思いながら今まで以上に仕事に取り組み、学生に関わっていきたいと思っています。

一方で、大学組織の中で持続可能な運営体制が、現在の社会連携教育課の大きな問題となっています。コーディネーター等は任期付のスタッフですし、専任職員も当然のごとく人事異動があります。

社会連携教育課の「持続可能な運営」について、ぜひとも学内の叡智を結集し、方策を見出していただきますよう重ねてお願いを申し上げ、私の話は終わりにしたいと思います。

